著書「脳を創る読書」（B6判199ページ、税込み1、260円）を片手に講演する酒井氏。著書の副題は「なぜ『紙の本』が人にとって必要なのか」

『脳を創る読書』（実業之日本社刊）

著者・酒井邦嘉氏が講演

読書を通し「脳」成長

実業之日本社から刊行の「脳を創る読書」の著者、酒井邦嘉氏が四日、東京・西新宿の朝日カルチャーセンター（新宿住友ビル内）で講演した。身近なことから脳の不思議や人間の精神活動に重要な部分を占める言語の役割を考え、電子書籍など近年の読書の形態の変化まで考察。読書のあり方を専門の脳科学研究から紹介した。酒井氏は一九六四年、東京生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、東京大学医学部助手、マサチューセッツ工科大学客員研究員などを経て現在、東京大学大学院総合文化研究科准教授。

当日は「脳を創る　紙の本で読む、電子書籍で読む」と題し、セミナー形式で行われた。

酒井氏は、「言葉の仕組みを理解することで脳がどのように創られるのか、読書の意味について考えたい。文章を読んで書き手がどのようなことを伝えたいのか想像したり、思索にふけることは自分自身で考える力を育て、新しいことが分かったりして、読書を通して脳は成長する。電子書籍の出現で今は出版の歴史の過渡期とも言われるが、私にすれば懐疑的。手書きの文字に比べ、活字になっていると誤字に気付きにくいように、脳は思い込みや先入観から物事をみてしまいがち。これは、いわば人間らしさでもあるが、コンピュータ画面ではさらに注意を向ける範囲をコントロールしにくく、見落としてしまう。人間の五感のうち、視覚情報はとくに強いが、そのほかの手触り感、例えば紙の本が持つ厚みや、自分の関心がある文章が本の真ん中にあったなどの位置情報は意外と覚えているもの。この多くの手掛かりが読書体験を豊かにする。電子書籍は情報量、効率、経済性を追求する一方、記憶に残るオリジナリティ〈個性〉に乏しい。私は大学で学生にすべて手書きでのレポート提出を課すが、現状の電子書籍やプログラムでは、まだ教育には不十分。コンピュータに先生の代わりは務まらない。人口知能においてコンピュータが心を持つのはまだ遠い先。体験を重ねた上での記憶は心を扱う上でとくに大切。門前の小僧、習わぬ経を詠む、の通り、過度な情報に繰り返し触れることで、脳は執拗に行われるものは自然に重要度が高いと認識して学習する。記憶とともに想像力、考える力も大切で、とくに学習では、情報の量が少ないことが高い効果を生む。映像より音声、音声より活字のほうが想像する力を発揮し、逆に情報の出力ではメールより手紙、さらに相手と話す電話、それよりも相手と接し、表情を見ながら話す会話のほうが豊かな言葉を育む。一方、学習で覚えたことを忘れないことも必要だが、それには思い出す手掛かりをできるだけ豊富にしておくこと。つまり効率、経済性を重視する電子書籍とは全く逆で、覚えるときの手順をできる限り、煩わしくしておくと良い。言葉の世界にはまた、見えないルールがある。いわゆる学校文法は、言語の文法の一つに過ぎず、音楽でも楽譜にない微妙な音の強さ、長さ、変化がある。奏者はそれを想像し、その曲らしく演奏する。囲碁、将棋も定石にはない次の一手がある。言葉の世界は複雑で使い方も無限な広がりをみせる。読書を通して人間の思考に欠かせない言葉の世界を豊かにする、脳を創る読書は電子書籍では果たせず、紙の本が欠かせない」と話した。